

目次

はじめに iii

第1部 古代日本語の格

第1章

古典語の格標示に関する諸問題 小田 勝 3

第2章

古代日本語における「問ふ」を述語とする構文の格標示法の変化について
..... 後藤 睦 21

第3章

上代語の主文終止形節における格配列、相互識別、無助詞現象
..... 竹内史郎 39

第2部 日本語方言の格

第4章

本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について
一京都市方言と宮城県登米町方言の分析一 竹内史郎・松丸真大 65

第5章

富山市方言における格成分のゼロ標示
一二重対格相当構文が可能になることに着目して一 小西いずみ 91

第6章

九州方言の格表現

一熊本市方言と博多方言の基本配列を中心に一 坂井美日 109

第7章

宮崎県椎葉方言 格の諸相一与格を中心に一 金田章宏 137

第8章

宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示

..... 下地理則・松岡葵・宮岡大 157

第9章

日本語諸方言の主語・目的語の格標示形式 木部暢子 175

第3部 日本語の格と言語類型論

第10章

日琉諸語の格体系一概観と類型化一 下地理則 205

第11章

南・田窪の4段階説と格・焦点表現

一談話情報との関連から一 金水 敏 239

第12章

日本語方言の斜格 佐々木冠 255

第13章

言語類型論から見た日本語の格 風間伸次郎 277

索引 299

執筆者紹介 307

第1章

古典語の格標示に関する諸問題

小田 勝

1. はじめに

格助詞は、日本語の機能語の中で最も変化の少ない語類である。いわゆる学校文法で文語の格助詞とされるのは「が・の・を・に・へ・と・より・から・にて・して」の10語であるが¹、その語形も意味・用法もほぼ現代語と共通しており、古文の学習の入門期にあって特に注意されるのは、同格の「の」、「馬より行く」のような手段を表す「より」、即時（「…やいなや」の意）を表す「より」くらいであろう²。しかし、少しでも慎重に観察するならば、現代語との相違点は多々存し、古典語独自の格のシステムとして考えなければならない問題もまた多いのである。例えば、

- (1) 敷島や高門山たかまどやまの秋風に雲なき峰を出づる月影 (続後撰 320)

[†] 本章の1節、3節は、国立国語研究所で行われたシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」(2019年1月14日)で発表したものをもとに改稿したものである。

- 1 格助詞「で」は平安中期以降現れる（「銀^{しろかね}作タル牙」今昔物語集 27-31）。
- 2 このほかでは、尊敬すべき動作主を表す「に」、経由地を表す「より」、比喩を表す「の」「と」など。

第2章

古代日本語における「問ふ」を 述語とする構文の格標示法の 変化について

後藤 睦

1. はじめに

現代日本語（共通語）における格助詞ヲは、(1)に示すように、他動詞文の目的語を標示する。

- (1) 子どもが 花瓶を こわす。 次郎が 針金を 曲げる。

格助詞ヲは基本的に目的語を標示し、その機能は古代日本語においても同様であったとされる。その一方で、現代日本語では格助詞ヲで標示されない名詞句が、古代日本語ではヲで標示されていたことも指摘されている。例えば、下記の(2)のように、現代日本語においてニで格標示される名詞句が、古代日本語の用例を見るとヲで標示されているような例が見られる。

- (2) a. 大坂に遇ふや娘子を道^ニ問へば(袁登売袁美知^ノ斗閉婆)直には告
らず当芸麻道を告る【大坂で出会った乙女に道^ヲを尋ねると】
(記歌謡 77・紀歌謡 64)
- b. ぬばたまの夜見し君を明くる朝逢はずまにして(奴婆多麻乃欲流見
之君乎安久流安之多安波受麻尔之旦)今そ悔しき【夜逢ったあなた
に明くる朝逢わずじまいで】 (万葉 15・3769)

第3章

上代語の主文終止形節における 格配列、相互識別、無助詞現象

竹内史郎

1. はじめに

よく知られているように、古代日本語では主語も目的語も無助詞であるのが普通である。この一方で、ガやノ、あるいはヲといった有形の格標示もあり得るので、無助詞と有形格標示との関係が問題となる。無助詞と有形格標示が機能的に対立しているとの見方は根強いと思われるが、従来の研究においては両者の使用の頻度が示されているに過ぎず、それらの機能差は明らかにされていない。しかしながら、古代日本語の自動詞文や他動詞文を観察してみると、無助詞と有形格標示が機能的に対立しておらず、有形格標示があってもなくても何ら変わるところがないという場合が多々見受けられる。例えば(1a)と(1b)の比較からは、無助詞名詞句と有形格標示された名詞句に機能差が認められず、両者の関係を形式は異なるが同じ機能を果たしていると見る余地があるだろう。

† 本章はJSPS科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号26370549、挑戦的研究(萌芽)課題番号20K20704)、平成29～令和3年度成城大学特別研究助成の助成を受けている。また稿を成すにあたり、坂井美日、下地理則、新永悠人の各氏には有益なコメントを頂戴した。記して御礼を申し上げる。

第4章

本州方言における他動詞文の 主語と目的語の区別について

京都市方言と宮城県登米町方言の分析

竹内史郎・松丸真大

1. はじめに

本州方言の文法記述には、しばしば標準日本語研究の枠組みにとらわれない視点が必要となってくる。本州方言の文法現象には、その分析や説明のために通言語的・類型論的な視点が不可欠なものがあるからである。本章では、そうした視点が欠かせない本州方言の研究事例として、他動詞文の主語と目的語がどのように区別されているのかということを考える。

通言語的研究においてグローバル・ストラテジーと称される、他動詞文の主語と目的語を区別するやり方がある。このやり方は、一見遠い異言語にそなわるものと眺められがちだが、実のところ本州方言にも認められ、なおかつきわめて身近なものである。本章では、京都市方言と宮城県登米町方言のデータに基づき、語順、格標示といった手段が有生性効果と協調してどのよ

† 本章は、科研費・NINJAL 共同研究プロジェクト合同シンポジウム「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015年8月23日、国立国語研究所)における口頭発表に基づくものである。席上および発表後、大野剛、下地理則、中川奈津子、新永悠人の各氏からコメントをいただいた。記して御礼を申し上げる。

なお、本章は JSPS 科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号 26370549、挑戦的研究(萌芽) 課題番号 20K20704) および平成 29～令和 3 年度成城大学特別研究助成における研究成果の一部である。

第5章

富山市方言における 格成分のゼロ標示

二重対格相当構文が可能になることに着目して

小西いずみ

1. はじめに

富山市方言では、自動詞文の主語、他動詞文の主語、他動詞文の目的語がいずれも無助詞で表されるのがふつうである。移動の着点を表す場合など、二格相当の名詞句の一部も無助詞になりうる。

- (1) キョー アメ Ø フルヨ。
(今日は 雨が 降るよ。)
- (2) ダレ Ø サラ Ø ワッタガ。
(誰が 皿を 割ったの?)
- (3) ゴミ Ø チャント ゴミバコ Ø イレラレ。
(ゴミは ちゃんと ゴミ箱に 入れなさい。)

さらに、(4)のように、他動詞使役文で〈動作主＝被使役者〉と〈対象〉とがともに無助詞で表される文、(5)のように、〈対象〉にあたる二つの名詞句

† 本章は、国立国語研究所合同研究発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015.8.23)、第108回九州大学言語学研究会(2018.5.26)での発表内容に修正・加筆したものである。有益なコメントをくださった上記の会の出席者や本書の編者に御礼申し上げる。また、本研究は、JSPS 科研費 JP26244024、JP19H01255、20H00015、20K20704 の助成を受けている。

第6章

九州方言の格表現

熊本市方言と博多方言の基本配列を中心に

坂井美日

1. はじめに

本章は、九州方言の中心格（主語と目的語の格）を研究対象とし、特に主語標示に注目する。九州には、主語を標示する形式として「ガ」と「ノ（またはン）」の2種を使う方言がある。例えば熊本市方言では、(1a)のようにガを使う場合も、(1b)のようにノを使う場合もある。以下、異形態を一括して扱う目的から¹、前者を「ガ系」、後者を「ノ系」と称す。

[†] 本章は、日本学術振興会特別研究員奨励費(17J05328 / 研究代表：筆者)、若手研究(B)(16K16851 / 研究代表：筆者)、及び、人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」において進められた鹿児島県薩摩川内市甌島方言の記述プロジェクト(研究代表：窪菌晴夫氏)の成果を含む。調査においては、三浦桂資氏、中山和子氏、坂井康祐氏、坂井菜穂子氏をはじめ、多くの方にお世話になった。この場を借りて、厚く御礼を申し上げる。また、執筆にあたり、青井隼人氏、下地理則氏、竹内史郎氏、新永悠人氏に多くの助言をいただいた。御礼を申し上げる。なお、本章に問題がある場合、その責任は全て筆者にある。

1 熊本市方言などでは、「ノ」の異形態として「ン」が現れる(後述)。また、九州の主語標示「ガ」「ノ(またはン)」と、琉球の主語標示(「ga / nga」「nu」)は、バリエーションの関係にあると考えられる。これらを一括して扱う目的から、「系」で捉える方針をとる。

第7章

宮崎県椎葉方言 格の諸相

与格を中心に

金田章宏

1. はじめに

この章では宮崎県椎葉村と国立国語研究所が2015年～2016年に実施した共同調査から、格形式におけるいくつかの興味深い特徴をとりあげる。

椎葉村は人口三千人程度、九州山地中央の山奥深くに民家が点在し、岐阜の白川郷、徳島の祖谷溪とならんで日本三大秘境と称される。平家の落人伝説もあり、柳田國男が民俗学に目覚めた里としても知られている。椎葉村には町内会という単位で10地区があるが、それぞれのあいだの移動は現在でもそれほど容易ではない。

本章でとりあげる名詞の格でとくに特徴的なのは、与格にみられる助辞ガによる焦点化＝強調表現や、「ゾウは鼻が長い」ではなく「ゾウのは鼻が長い」というタイプの同一物の二重表示などである。

こうした特徴は、すべてが村内の全地区にみられるわけではなく、地区ごとにみられる違いも少なくないので、用例には地区名¹をそえる。また、用例では、]を下降、[を上昇の記号としてイントネーションをしめす。無声化した母音の下に半角の「。」をそえる。

なかとう おむかい ふ、ど の つが お こさき まつ お
1 仲塔：仲、尾向：尾、不土野：不、拇尾：拇、小崎：小、松尾：松、と略称する。

第8章

宮崎県椎葉村尾前方言における 形容詞述語文の格標示

下地理則・松岡葵・宮岡大

1. はじめに

九州方言のうち、少なくとも宮崎県椎葉村尾前方言、佐賀県武雄市北方方言（松岡 2019a）、鹿児島県甑島方言（久保蘭 2018）、長崎県五島列島宇久島野方方言（中村 2019）では、以下に示すように、二項述語文となる形容詞述語文の第二項（下線部）が、主格ではなく与格を取る場合がある。以下、{ガ／ニ} は、交替可能であることを示す。例文は音韻表記をもとにした仮名表記を用い、音韻語単位でスペースを入れる（尾前方言の音素論については下地 2016a を参照）¹。

(1) 宮崎県椎葉村尾前方言（筆者フィールドデータ）²

[†] 本章は基盤研究(B)「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」(19H01255 代表：下地理則)の助成を受けている。

1 尾前方言では、他の多くの九州方言同様、与格助詞が接続先(ホスト)と音韻的に融合することがあるが(例：//kaminari//「雷」+//ni//→/kaminarii/「雷に」；//kata//「肩」+//ni//→/katyaa/「肩に」、etc.)、しないこともある。今回のデータを見る限り、高齢の話者(80代)でも融合が起こっていない。椎葉村方言の与格助詞の融合の様相については7章参照。

2 以下、断りのないものは宮崎県椎葉村尾前方言のフィールドデータによる。

第10章

日琉諸語の格体系

概観と類型化

下地理則

1. はじめに

本章では、既存の記述研究のデータと筆者自身のフィールドデータをもとに、日琉諸語を広く扱い、東北・北関東方言、近畿方言、中国四国方言、九州方言、琉球諸語を対象にして、これらの諸方言に見られる格配列を類型化する。

2. 格配列とは何か

自動詞文の主語(S)、他動詞文の主語(A)、直接目的語(P)のうちどれとどれが同一標示になり、どれが別扱いになるかという問題は格配列(case alignment)の問題と呼ばれる。以下の4つが、世界の言語でよく見られる格配列のパターンである。スラッシュは、同一標示の境界を示し、例えば、対格型はASを同一の標示(主格標示)、Pを別の標示(対格標示)にするのに対し(1b)、能格型はSPを同一の標示(絶対格標示)、Aを別の標示(能格標示)にする。下線は何らかの積極的な格標示(日琉諸語で言えば格助詞

[†] 本章は基盤研究(B)「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」(19H01255 代表：下地理則)の助成を受けている。

第 11 章

南・田窪の4段階説と格・焦点表現

談話情報との関連から

金水 敏

1. はじめに

近年、Lambrecht (1994、2000)、下地 (2016)、Shimoji (2019)、竹内・松丸 (2019)、新永 (2019) 等に見るように、格成分と情報構造の交渉に着目した研究が成果を上げつつあるが、この種の研究のためには、記述的研究に加えて統語論、意味論、語用論、談話理論にまたがる理論的な考察が不可欠である。それぞれの分野ではそれなりの成果が上がっていても、その成果を統合していく視点が未だ十分育っていないように思われる。本章では、現代日本語書き言葉を素材として、生成文法、南／田窪の統語・情報構造理論、外延的意味論、談話管理理論を融合した枠組みで、焦点の統語・意味論の精緻化を試みる。現代日本語書き言葉は格成分にはほぼすべて格助詞がついており、情報構造に関わる情報が乏しいが、その背後に一定の構造を読み込むことで整理が可能であると考ええる。

本章は以下のように構成される。2 節では南不二男氏の日本語の文構築における 4 段階説を統語・情報構造の観点から整理し直した田窪行則氏の学説を示す。3 節では、2 節で見た構造を Chomsky (1995) その他のいわゆるミニマリスト・プログラムに準拠した文構成と解釈のプロセスに取り込むことを提案する。4 節では、Stalnaker その他の談話意味論を参照しつつ、田窪行

第12章

日本語方言の斜格

佐々木冠

1. はじめに

日本語の斜格には地域的な多様性がある。ロドリゲスの『日本大文典』(1604–1608)に記された「京へ筑紫に板東さ」は、方向を表す斜格の地域的な多様性を表す言葉である。日本語の方言研究には斜格助詞の地域的な多様性に関する記述の蓄積がある。斜格助詞の中には他の文法範疇から転じたものもあり、文法化の観点からの研究も行われている。

本章は、標準語で与格助詞「に」が用いられている領域で使われている方言の斜格助詞に焦点を当て、斜格に関連する文法上の問題について論じる。2節から4節にかけて標準語の「に」の領域で複数の斜格助詞が使い分けられている方言を取り上げ、斜格の分岐によって見えてくる統語論上の問題について論じる。5節では、受動文を例に標準語の「に」の領域の一部を他の斜格助詞が担う現象を取り上げる。6節は標準語の「に」に相当する方言の

† 本章で示す方言のデータは佐々木(2004)から再録したもの(標記は変更してある)と科学研究費補助金基盤研究(C)22520405、24520418、15K02489の助成を受けた調査で得られたものである。長時間調査にご協力くださった大滝仁作氏、川崎めぐみ氏、田附敏尚氏、野口かね氏に感謝の意を表したい。全ての誤りの責任が筆者にあることは言うまでもない。

第13章

言語類型論から見た日本語の格

風間伸次郎

1. はじめに

1.1 本章の構成と目的

以下本章では、まず格というものが従属部標示型の言語における名詞と述語間の関係標示の手法であることを確認し、その上で類型論的に見て比較的格の数が多言語について検討・考察を行う。その結果、格の数の多い言語は①基本語順がSOVである、②場所を示す格を多く持つ、という特徴を共有していることを確認し、日本語はまさしくそのタイプの一言語であることも確認する。さらに文法項と場所項の連続性という観点から、日本語の属する類型を規定し、この類型を示す言語において内的に関連して現れると考えられる他の類型的諸特徴についても考察を広げる。

1.2 格関係の標示方法一般と主要部標示型の言語

Nichols (1986) の分類にしたがえば、格は従属部標示型言語が、人称は主要部標示型言語が示す標示であり、語順による格関係の標示は無標示型、すなわちいわゆる孤立型の言語に典型的な手法ということができよう。

このうちまず語順の使用については、中国語のような孤立型の言語がSVO語順によってその関係を示していることを想起していただければよい。